《論　文》

台風災害の生徒への心のケアで何が必要だったか？
～高校教員の声～

菊　池　浩　光

札幌学院大学

要　　約

200X年８月，北海道を襲った台風によって２名の高校生が犠牲になった。夏休み中の突然の出来事に学校は衝撃に包まれ，対応に追われた。多忙を極める中，教員は生徒たちの心のケアにも取り組まなくてはならなかった。ところが，教員たちは，心のケアという言葉は知っていても，それを実践し具体的な方策を創造していくことは自分たちで考えなくてはならなかった。筆者はこの災害における心のケア活動に関するアンケートを実施した。心のケアへの道をつけていくことができた背景には，優れたリーダーシップがあり，教員間での共通理解と外部への支援要請がはかられ，ついには学校全体で危機を乗り越える気運が醸成されたという要因が考えられた。

キーワード：学校，自然災害，犠牲者，心のケア

１．はじめに

200X年８月に北海道の道央・道東部を襲った台風は，林業や農畜産業に物的，経済的に甚大な被害をもたらしたばかりでなく，死者，行方不明者10名以上の人的被害を出すに至った。

台風の直撃を受け，豪雨被害が集中した地域にあるＡ高校の生徒２名も行方不明となった。夏休み中のことで，しかも人命に関わる異常事態に直面した高校職員の戸惑いと混乱は相当なものであったと思われる。実際，教員は，生徒の安否確認や被害調査の実態を把握するための電話連絡だけで一日が忙殺され，さらに，行方不明者が事故から10日を経ても見つからないという焦りの中，情報の収集や確認や共有，生徒や保護者への対応，捜索活動への協力，教育委員会など各関係機関への報告や対応，マスコミ対応など，２学期開始を前に多忙を極め，一部の職員の疲労はピークに達していた。当時はまだ北海道教育委員会や臨床心理士会のバックアップや連携体制は現在ほどシステム化されておらず，それらの機関の初動は遅かった。

残念なことに，学期始業式をはさんで相次いで２名の生徒の死亡が確認された。生徒への心のケア対策は，被害生徒が行方不明の段階から計画されていたが，当時，速やかに専門家を派遣す

る制度は整っておらず，学校が自分たちで外部から専門家を探し出さなくてはならなかった。大学教員，医師，PSWの３名を招請し，うち１人は教員と生徒への講話を１回ずつ，他の２人は教員へのサジェスチョンと生徒へのカウンセリングという形で関わった。

教員にとって，「心のケア」という言葉は知っていても，自校や自分のクラスで不慮の事態が生じて初めて，誰がいつどのようにそれを行うのかに関して無策な現実に直面することがある。というよりも，この当時はそれが常であったと言ってよい。それゆえ，災害の緊急事態の経験者が，困惑や戸惑いの状況から道を開いていった経緯を記録に残しておくことは，今後の対応を考える上で貴重な財産になると思われる。そこで，教員を対象にこの死亡事故の一連の心のケア活動の体験についてアンケート調査を行なったので，若干の考察を加えて結果を報告したい。また，その現場のリアルな声は大変貴重なものであり，その記録を残すことも本稿の主旨の一つである。

２．対象と方法

筆者は当時，地方の総合病院に勤務しながら災害時の心のケアについて問題意識を持って研究していた。このときは，Ａ高校に直接赴くことはなかったが，自作の『学校におけるこころの危機場面での子どものケア』のパンフレットを災害発生後すみやかに教員数だけ学校に送付した。それが学校との接点となり，その約１ヶ月後，一連の心のケア活動の道をどのように開いていったかを調査することの有用性を説明したアンケート依頼文書を送付したところ，了承を得ることができた。

そこで，Ａ高校の教員を対象に，今回の事態を振り返って，生徒への心のケアにおいて，何が有効な支援となり何が必要だったかなどについて記述式のアンケートを施行した。実施時期は，生徒の死亡確認から約７週間後（四十九日の頃）とした。依頼文書の中で，今回の調査の必要性のほか，プライバシーを考慮した上で結果をフィードバックすることと学会などへの発表があり得ることについて明記し，記名については任意とした。アンケートは，担当窓口となった教員を介して配布，回収された。なお，アンケートは集約された後，結果は学校に送付してフィードバックした。

３．結果

41名の教職員のうち19名（46.3%）から回答があった。

アンケートの記述内容はKJ法によって分類し，項目を設定していった。その結果を別表１～５にまとめた。切実感に満ちた貴重な記述が多かったため，代表的な意見はそのまま掲載している。

問1-1は，生徒への心のケア支援にあたって何が困難だったかを聞くものであるが，最も多かったのが，「生徒の気持ちを把握できるかどうかの不安」であり，「生徒への接し方の見通しがつか

ず，動揺している生徒，ショックを表に出せない生徒への関わり方が分からない」ということであった。「ケアのための場所と時間の確保」「マスコミの取材攻勢」「来賓接待」「書類手続き」など，煩雑で未経験の事案が矢継ぎ早に押し寄せる中，戸惑いながら必死に対応された様子が現れていた（表1-1）。

問1-2は，その時，どうして欲しかったかという対応のニーズについての質問である。２学期開始が刻々と迫ってくる中，心のケアの専門家のアドバイスに基づいた教員間の共通の認識を早期に作りたかったという声が切実だった。「専門家の迅速な派遣とアドバイス支援」「簡素化された事務手続き」，また「モラルに基づいたマスコミ取材」が挙げられていた（表1-2）。学友を突

表1-1　支援場面における困難

問1-1　生徒への支援全体を振り返ってみて、教員として大変だったり困難を感じたのは具体的にどんな場面でしたか？

生徒の気持ちの把握と適切な関わり方が分からなかった
・被害の大きさや影響の大小など当然個人差があるが、それを正確に把握し的確に対応できるかどうか不安であり、また、困難だった。
・被害にあった（亡くなった）生徒が見つかるまでの期間、他の生徒にどのように対応するべきか。特に事故が報道された直後はかなり動揺している生徒が数名いた。
・残された生徒たちにどのようにひと区切りをつけさせ、どのような形で再出発をさせ、どのように接していけば良いかということ。今まで経験したことがないのでどのようなアウトライン、スケジュールで進めれば良いのか、ほとんど自分のイメージまかせであった。
・ショックを受けて表に出さない（出せない）子への対応をどうすれば良いか分からなかった。
・始業式当日、情緒不安定になった数人の生徒を保健室で対応。友達を失った悲しみは多感な生徒たちにとって苦しいものであると痛感したが、十分なケアのための時間や場所の確保に苦慮した。
マスコミ対応が大変
・マスコミ対応をどうしたら良いのか。どこまで取材に応じるか。
・取材攻勢への対応にうんざり。大変な時に時間はとられるしプライバシーに関わる部分をしつこく聞いてくる。
来賓の接待が大変
書類手続き
・役所への報告や計画書など書類提出や予算の関係のやりくり。予算措置が即座に決定されないので早い対応が難しい。

表1-2　困難場面で必要だった対応

問1-2　そのときどのようにして欲しかったですか？

専門家の迅速な派遣とアドバイス支援
・教委がリーダーシップをとり、専門医をすぐに現場に派遣するシステム。
・精神科医やソーシャルワーカーなど専門家の方に助けられたが、もっと早い時期にそのチャンスが欲しかった。
・教員間の共通理解の場を作ること。専門家の話、アドバイスが欲しかった。
・この状態は予想できたのだから、始業式初日くらいは専門医を別室で待機させておくべきだった。
簡素化された手続き
・書類などの整備は後回しで多忙な時は口頭で簡略化されたい。
モラルに基づいたマスコミの取材
・抜け駆け取材などないように幹事社がしっかり対応して欲しい。取材される側の「痛み」を理解して欲しかった。

表1-3　困難の乗り越え方

問1-3　その困難をどのように乗り越えたのですか？

困ったことは協議して自分たちの手で
・教頭と若手が中心となり、これからのアウトラインを決め、そのために必要となる人材（専門医）を自分達の人脈で選定し、そのアウトラインのスケジュールにのっとり日常生活を送った。
・予め勉強会を開き対応の仕方について理解した。
・複数の教員で生徒に対応することで悩みを引き出せたと思う。
自己コントロール
・自らが動揺せず落ち着かせるように心がけた。確かな情報が得られるのを待つように指導。これくらいしかできなかったという感が強い。
専門家や関係者の支援
・専門家にいろいろな対応について教えて頂き理解できた。
・教職員、ＰＴＡ、周囲の皆様のお陰で、何とか大変さや困難も乗り切れた。
できることを精一杯
・消息不明者の捜索協力など自分にできることを精一杯やった。
・あきらめて何となく精一杯対応し、精神的に非常に消耗した。
・乗り越えたというより時の流れにまかせた。

然失う事態に遭遇して生徒はどういった心理状態で教員としてどのように関わりどのような声かけをしたらよいのか，それを早く知るために専門家の派遣は待ち望まれているものであった。

問1-3は，その困難にどうやって対応したか，を尋ねたもので，「困ったことは自分たちで協議して解決に向かった」「自分を落ち着かせるようにした」「専門家やＰＴＡなど関係者の支援を求めた」などの回答があった（表1-3）。大切な仲間を失ったという点では教職員も生徒も同じである。その心の動揺を抱えて事態に当たらなくてはならず，自分自身の心をコントロールしながら，夢中でできることに取り組んだ足跡がうかがえた。このようにして，心のケアについてのアウトラインが協議され，専門家が確保され，学校全体の対応方針が定まり，始業式当日から実行された。なお，筆者は，始業式前日に，生徒たちにどのように話をすればよいのか教員から電話相談を受けた。

問２は，支援全体を振り返り，良かったこと，役に立ったことは何かという設問である。「専門家による生徒へのカウンセリングや教員へのアドバイス」「平易で簡潔なパンフレット」「教員間での事前の共通理解」「全校集会やホームルームで痛みを共有する時間を持ったこと」，また，「やるべきことは全てやった方がよい」という意見などがあった（表２）。既知の間柄で共に過ごす時間が長い教員が，生徒の心情に配慮して寄り添っていくことによる癒し力は非常に大きい。

問３は，問２とは逆に，役に立たなかったこと，やめた方がいいことについての質問であるが，「専門家の生徒への講話」「煩雑な事務手続き」が挙げられていた（表３）。講話については，必要な内容であっても，その時の生徒の心理状態とマッチしているかといったタイミングの問題が大きかったのではないかと推測された。

問４は，同じような事態に遭遇すると仮定した時に何を整備しておけばよいかについて，もの，人，システム，その他，に分けて尋ねた。整備すべきものは，「危機対応やマスコミ対応に関する

表2　役に立った支援

問2　生徒への支援全体を振り返ってみて、これは良かった（役に立った）、今後も続けた方がいい、と感じたことにはどんなことがありますか？

専門家によるカウンセリング
・専門家が心のケア派遣で来てくれたこと。
・心のケアが必要と思われる生徒に対する専門的カウンセリング。
専門家によるアドバイス
・専門家にいろいろ教えて頂いたこと。心のケアに関する講義、相談する場面が設けられたこと。自分自身で整理したり安心したりできる部分があった。
・精神科医及びソーシャルワーカーによる教員対象のお話はとても良くてホッと息が抜けた。
パンフレット
・パンフ「学校における心の危機場面での子どものケア」が、一番簡潔で分かりやすく納得できた。
事前の共通理解
・始業式を迎えるための事前の共通理解。
・ケースバイケースだと思うので勉強会などで対応方法について共通理解を持つこと。
全校集会・ＨＲでの活動
・全校の集会を持ち心の痛みを共有すること。
・今回の被害についてHRで話す時間を設けた。行なう前は私自身が消極的だったが、やってみたら多少なりとも効果があったようだ。目をつぶるわけにはいかないので、だましだましやるよりは共有できる部分を作れて良かった。
その他
・やれるべきことは全てやることが良い。
・儀式に積極的に参加させること。

表3　役に立たなかった支援

問3　生徒への支援全体を振り返ってみて、これは悪かった（役に立たなかった）、今後はやめた方がいい、と感じたことにはどんなことがありますか？

専門家の講話
・外部から招いて生徒に講話をして頂いたが、生徒にはあまり・・・。話の内容にもよるのだろうが。
煩雑な事務手続き
・心のケアの派遣には手続きが色々と必要で、緊急多忙の際の繁雑な手続きは勘弁願いたい。
・行政に依頼文書を上げなければ進まないというシステムではなく「生徒被災」が確認された段階で「絶対心のケアは必要」という認識に基づいたシステムが欲しい。

パンフレットやマニュアル」。これには，一目見て理解できるような簡潔さが求められている。また，「ゆっくり話ができるカウンセリングルームが２部屋くらい必要」。システムについては，「災害時の連絡や統括部署」「手順などの対応システム」「電話１本ですむような簡素な支援要請システム」。これについては，生徒被災が確認された時点で教育委員会から自動的に心のケアが必要という前提にたって派遣などの対応を考えてほしいという意見があった。また，教員と被害生徒との距離感は学年やクラスなどによって相違があり，「養護教諭など一部の人に負担がかかってしまうことへの懸念」が述べられていた。人材としては，「心のケア専門家」「人手の増員」などが挙げられていた。その他整備すべき点としては，「教育委員会と現場が一体になった対応」「専門家による研修」「リーダーシップと組織体制」「教職員の心身のケア」「メンタル面に重点をおいた人材の育

表4　今後を見すえて整備すべきもの

問4　万が一、同じような事態に遭遇するとしたら、今から何を整備しておく必要があるでしょうか？

●こういうものが手元にあれば良いと思った「もの」は？
マニュアル、パンフレット
・ある程度の危機管理のマニュアル。
・同じような経験をした学校の対応などをまとめたもの。
・パンフ「学校における心の危機場面での子どものケア」はとても有効だった。生徒向けもあればよい。
・マスコミ対応の事例があると良い。
カウンセリングルーム
・生徒とゆっくり話ができる、ある程度の広さを持った部屋が１～２部屋。
●こういうシステムがあれば良いと思った「システム」は？
災害時の対応システム
・災害時の連絡方法、対応の仕方を確立しておくこと。
・災害に対して統括する部署。
・このような危機が学校に起こった場合、どのような手順で何をどうしていけばいいのか、道教委が把握し、現場優先の手順、方策をとること。
簡素な支援要請システム
・困った時に電話1本で必要なことが済むシステム。
「心のケア」支援システム
・カウンセリング。
・こころのケアが必要になった時に、すぐに相談体制ができること。
校内システム
・心身両面において養護教諭に負担のかからない救護体制。
●こういう人がいれば良いと思った「人材」は？
心のケア専門家
・心のケアについてアドバイスしていただけたり細かなことを相談できる専門家
その他
・リーダーシップをとってくれる人（本校にはいたので問題なかった）。
・マスコミ対応のための手慣れた人員の配置（増員）。
・多数の人員。することは山ほどあるので、生徒に関係する部分は内部の教職員で、誰でもできることは外部の助っ人で。
●その他、どんな点を改善したり整備すべきでしょうか？
現場と一体になった対応
・災害の翌日に教委の被害調査がきたが締め切りも非常に慌ただしくなぜそんなに急ぐのか、現場の状況を理解していないと疑問だった。
研修
・専門家による対応方法の勉強会、研修。
リーダーシップと組織体制
・システムなどはまがりなりにもあり、それを使うリーダーシップが必要。
教職員の心身ケア
・物理的にも精神的にも負担にならずに年休をとれる体制づくりが必要。
・教職員の疲労もピークで、該当学級の教諭にも心のケアは必要。
人材育成・人材配置
・ハード面での保健衛生管理士の制度はあるが、メンタル面に重点をおいた安全管理の人材配置、育成システムを法制化すべき。
・保健室も日常執務に加えてかなりハードな毎日で、補助教員が欲しいと思った。
予算情報の提供
・「心のケア」を実施する予算が何回あるなど事前に詳細を知らせて欲しい。
外部専門家との連携

表5　その他感じたこと

問5　その他、今回の御経験でお感じのことがございましたら自由にご記入下さい。

マスコミはプライバシー保護の徹底を
・マスコミの窓口を１つにしても、駅など教職員の目から離れた所でインタビューを行ない顔の映像と共に流れてしまった。プライバシー保護を考えて欲しかったし、しかるべきところから要請して欲しかった。
現場中心に考えるシステムが必要
・まずは「現場」。今、現場で何が必要で何に困っているのかを把握するシステム能力が欲しい。
・現場の教職員や学校からの要望を早めに上げること。上からの対応を待っていれば一番大事な時に必要な相談や指導ができない。
・誰もが普通の精神状態ではない中、被害調査のため何度も同じ家に電話をかけねばならないのがきつかった。
優れたリーダーシップが必要
・被害が強烈でマニュアルなど通用しない状況で大事なことは、リーダーとそのもとでの連帯感だと思う。特にリーダー次第で対応が全く変わってしまい、非常に大きな影響を占めると感じた。本校はそこがしっかりしていた。
自力で立ち直る経過も大切にしたい
・自力で立ち直ることができる生徒もいるはずなので、多少時間がかかってもそういった力に任せるのも必要。
・全て時間が解決してくれるという思いが強い。家族や周りの人々の苦しみや悲しみは余りにも大きかったが、乗り越えていかなくてはならないのだから、ゆっくりと時間をかけて話を聞いてやることが一番いいのかな。
・四十九日前後に心の動揺を隠せない生徒や体調不良での保健室入室が増えた。自力で悲しみを抜け出そうとしている生徒の姿があった。保健室で会話しながら少しづつ回復しているようでもあった。
心のケアに関する教員のスキル向上のための研修を
・心のキズを癒す知識と技能を持つ教員を増やさないとだめになってきている。普段の生活の中でもそのスキルは絶対生かせるはずなので、そういう内容の研修を受けやすい制度を構築すべき。

成や配置」「事前の予算情報」「外部専門家との連携」などの課題が挙げられていた（表４）。

問５は，今回の経験で感じたことの自由記述である。「マスコミのプライバシーの徹底保護をお願いしたい」「現場中心に考えるシステムが必要」「優れたリーダーシップが必要」「校内に危機管理マニュアルがあってもそれを使う人の問題が大きい」などの意見があった。生徒の心の立ち直りに関しては「時間がかかっても自力で立ち直っていく経過を大切にしたい」という意見や「心のケアに関する教員のスキル向上のための研修制度」を望む声があった（表５）。

４．考察

自然災害によって在籍生徒が複数名死亡するという学校として未曾有の事態に遭遇した教員たちは，心のケアの専門家やオーガナイザーが不在の状態で，不安や当惑の中，手探り状態で生徒たちの心のケア対策のかたちを重ねて協議し，創り出し，実践していった。当調査は，支援者としての教員の心理状態を問うものではないが，アンケートの文面からは，夏休み中でもあり，連絡を取って安否確認をすることさえ時間と労力がかかる上に，困惑と不安，悲しみや怒りを抱えながら２学期開始に向けて対応を模索し続けた職員室の雰囲気が漂ってくるようであり，燃え尽

き状態にまで至った教員がいたことも推測された。

そういった労苦と努力の中で，心のケア対策は醸成されていき機能していったのだが，それが可能だった背景は何だったのであろうか。アンケートの行間から浮かび上がってくる要因としては，（１）優れたリーダーシップ，（２）教員間で協議を重ねて智慧を結集し共通理解を図ったこと，（３）積極的に外部に支援要請を行ない人材を確保したこと，（４）教員と生徒，ＰＴＡの全体で危機を乗り越える気運が醸成されたこと，が多大に作用したのではなかったかと考えられる。

まず，（１）の「優れたリーダーシップ」であるが，責任ある立場にある人の考え方や姿勢の影響力は甚大であり，八甲田山の陸軍の行軍で起きた悲劇に見られるような，リーダーの判断ミスから組織や人命の行く末が決まってしまう社会的な事件は，現代に至るまで止むことがない。アンケートには「被害が強烈でマニュアルなど通用しない状況で大事なことは，リーダーとそのもとでの連帯感だと思う」という意見や「リーダーがしっかりしていた」という評価があった。こういったリーダーシップが，（２）の教員の共通理解，（３）の外部の支援の確保，（４）の学校の気運醸成に繋がっていって，困難打破に結びついたのではないだろうか。リーダーは，困ったら迅速に鳩首凝議する風土を作り，知識や経験がなければ専門家に頼る行動力，周囲に情報を適切に公開して応諾してもらい多くの人を同じ方向性に仕向けていく力などを発揮できたのではないかと思われた。

次に，（２）の「教員間で協議を重ねて智慧を結集し共通理解を図ったこと」であるが，災害の混乱を前にして「何から手を付けていいか分からないし，生徒にどう関わればいいのか分からない」といった戸惑いの声が多かった。こういうときには，まず「自分はこういうことで困っている」ところをお互いが共有するところから第一歩が始まるように思われる。つまづいていることを共有するだけで緊張や興奮は和らぎ，現実にアクセスしやすくなる。自分たちには何が足りず，それをどうやって補えばいいか話し合う中で智慧を交換し対策を練る。そして共通認識がはかられ，当面の方向性が決まって自分がするべきことの道筋が見えてくる。するとモチベーションも上がるものである。その中には，（３）として挙げた「積極的に外部に支援要請を行ない人材を確保したこと」も含まれるだろう。専門家がそこにいるというだけで関係者は安心感を得ることがある。現在では北海道教育委員会と臨床心理士会が連携した派遣システムがあるが，当時は，専門家の支援を申請するルートが決まっていなかったために自分たちの知己に頼って探し出さなくてはならなかった。（４）の「教員と生徒，PTAの全体で危機を乗り越える気運が醸成されたこと」についてであるが，当事者や周囲の人たちに不安がくすぶっていると，しばしば勝手な独断に基づいた不信や疑惑を生み出してしまい，ときには抵抗勢力を作り出すことがある。不安を解消するためには事実に根ざした情報公開を生徒や保護者，地域に対して適切に行ない方向性を指し示さなくてはならない。学校の困り感を公表することで，そういう事情があるのだったら何かしたい，と周囲が協力的な気持ちをもったりボランティアに踏み出したりする行動が期待できる。実際，安全上の問題で実現はしなかったが，警察などが行なっていた行方不明の生徒の捜索を手伝いた

いと申し出た生徒たちがいたそうだ。たとえ行動はできなくても心配して成りゆきを見守ってくれるような人々の気運を作っていった意義は大きかったのではないだろうか。また，こういう事態においては，実務的には一部の当事者だけがどうしても過負担になりやすいため，適宜に休みが取れたり負担軽減が図れたりするなど周囲の協力体制を作っていく配慮も重要であろう。

さて，この度取り上げた例のように，実際に自然災害に遭遇することによって体験したさまざまな困難は，学校現場で役に立つ対策作りに向けて，たくさんの示唆を残してくれている。

昨今，学校現場では不慮の事件，事故が起こり，危機介入が必要な場面が増えてきている。それに伴い，教育委員会が心のケアのために学校に臨床心理士を派遣する制度も普及してきている。学校や多様な災害，緊急事態場面におけるマニュアル的な成書も数多く出版されている（福岡臨床心理士会編, 2005 : 小西, 2012 : 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費外傷ストレス関連障害の病態と治療ガイドラインに関する研究班編,2001 : National Child Traumatic Stress Network and National Center for PTSD,2006 : 杉村他, 2009）。市橋（2012）は，阪神・淡路大震災後，暗中模索で始まった長期にわたる教育現場でのこころのケアについて教員の視点からまとめている。しかし，いざというときに，マニュアルが机上の空論に止まってはいけない。現場の経験に基づく智恵の蓄積こそが，実効性の高い対策への手がかりになると思われるため，このような体験が風化することなく，学校での対策に反映されていくアクションプランの策定が今後の課題であろう。

アクションプランの例として，心のケアが必要になるような緊急事態を想定した学校でのシミュレーションの制度化を提案したい。マスコミ攻勢による関係者への心理的圧力もしばしば問題になるところであり，これに限らず，生徒が自殺したり事故で急死したりした場合，外部の人間による殺傷事件が起きた場合などを想定して，多種の問題への介入の道筋を周知しておくのである。まず何をしなければならないのか，どのように対策本部を立ち上げるのか，誰がどのように動くのか，生徒にどのように事態を報告するのか，父母にはどう対応するか，傷つきが大きい生徒にどのように関わるのか，外部からの支援をどこにどのように要請するのか，書類のフォーマットは，マスコミ対策は，など，当惑が予想される場面は山ほどある。突然に生じた不慮の事態に対して，何かしたくても何からどのように手をつけていいか分からないという声は，今回取り上げた災害事故に限らず筆者はよく耳にする。その全てに応じられなくても，一度「心して」訓練を行なっておくのとおかないのとでは，その後の対応に大きな違いが出てくるだろう。いざその時になって分厚いマニュアルを読む心理的・時間的な余裕などはないのである。

避難訓練は毎年行事化されている。訓練の効果が大きいことの証左であろう。火災や地震に対しての避難訓練と同様に，学校場面で不測の事態が生じたときを想定したシミュレーションを重ねることで，当事者の最初のパニック様の動揺によるエネルギーロスはかなり抑えられ，現実に基づいた対策の方にエネルギーを振り向けられるのではないだろうか。

最後に，自力で悲しみから立ち直っていく過程を大切にしたいという声が複数あった点に注目したい。トラウマティック・ストレスを被って不安や動揺，悲嘆に苛まれていても，多くは時間

の経過と共に回復を見せていく（加藤・最相，2011）。自分の人生に組み入れることができない異物のような出来事が，その人の人生に同化していくには時間がかかることも多い。しかし，それによって人間的に成長することがあり，本人の回復を辛抱強く支え見守るはたらきは極めて重要である。「心のケア」と言えば，カウンセラーが話を聴いたり心理教育やリラクセーション，あるいは他のトラウマ解消の心理療法を援用したりするイメージがあるが，時間をかけて自力で苦しみや悲しみを乗り越えていこうとする気高い姿を支えていく周囲のサポートの重大性を忘れてはならないだろう。

文　　献

福岡臨床心理士会(編),窪田由紀・向笠章子・林幹男・浦田英範(2005).学校コミュニティへの緊急支援の手引き.金剛出版.

市橋真奈美(2012).阪神・淡路大震災後の教育現場での心のケアの取り組み-教員の視点から-.トラウマティック・ストレス,12(2),51-58.

加藤寛・最相葉月(2011).心のケア　阪神・淡路大震災から東北へ.講談社.

小西聖子(2012).トラウマの心理学　心の傷と向きあう方法.NHK出版.

厚生労働省精神・神経疾患研究委託費外傷ストレス関連障害の病態と治療ガイドラインに関する研究班編(2001).心的トラウマの理解とケア.じほう.

National Child Traumatic Stress Network and National Center for PTSD(2006).

Psychological First Aid:Field Operations Guide, 2nd Edition. 兵庫県こころのケアセンター(訳)(2011).サイコロジカル・ファーストエイド実施の手引き第2版.医学書院.

杉村省吾・本多修・冨永良喜・高橋哲(2009).トラウマのPTSDの心理援助　こころの傷に寄りそって.金剛出版.

What was necessary for the psychological support to students with the disaster of a typhoon? The opinions of the high school teachers

Hiromitsu KIKUCHI

Summary

A typhoon that hit Hokkaido in August 200X claimed the lives of two high school students. It occurred during summer vacation; the schoolteachers were shocked by the sudden loss of life amongst their students and became engrossed with various responses. Due to the severity of the situation, they had to pay attention to the "kokoro no kea" (short-term psychological intervention in Japanese) of the students. Even though the teachers knew the word "kokoro no kea," they had to think about putting the phrase into practice and making concrete measurers between themselves. The author conducted a questionnaire regarding "kokoro no kea" activities in this disaster.

What were the reasons why they could create the way of "kokoro no kea"? Those factors are excellent in leadership, shaped mutual understanding among teachers while requesting for external support, and ultimately gave motivation to all the school members to overcome this crisis.

Keywords: school, natural disaster, victim, psychological support

（きくち　ひろみつ　札幌学院大学心理学部　臨床心理学科）